

# 主 論 文 要 旨

報告番号	① 乙 第 4121 号	氏 名	宮 田 知 恵 子
主 論 文 題 名 Cancer Functional Assessment Set A New Tool for Functional Evaluation in Cancer (Cancer Functional Assessment Set : がん患者の新しい身体機能評価スケール)			
(内容の要旨) <p>がん医療では患者のQOLが重視されるようになり、リハビリテーションの需要も増大しつつあるが、既存のスケールでは、適切な身体機能評価や介入効果の詳細な判定が困難であり、新しいスケールの開発が急務である。そこで本研究では、多面的・経時的に評価した患者の身体機能データをもとに新しいスケールを開発し、その計量心理学的特性を検証した。</p> <p>本研究は、以下の3段階からなる。第1段階では、先行研究とリハビリテーション専門家32名の意見をもとに、がん患者のリハビリテーションにおいて重要な評価項目を抽出した。第2段階では、抽出した項目を用いて、静岡県立静岡がんセンター (SCC) におけるがんリハビリテーション対象患者45名の評価を行い、その結果より、さらに適切な項目を選択することで新たなスケール『Cancer Functional Assessment Set (cFAS)』を作成した。第3段階では、cFASの計量心理学的特性を検証した。まず、SCCにて69名を対象に、併存的妥当性 (既存の機能指標との相関)、内的整合性 (Cronbachの<math>\alpha</math>係数) を評価し、次に、慶應義塾大学病院 (KUH) にて、20名を対象に、検者間信頼性 (重み付け<math>\kappa</math>係数, 級内相関係数 ; ICC) を評価した。さらに、KUHにおいて、30名を対象に、併存的妥当性および内的整合性を評価し、SCCの評価結果と比較することにより、交差妥当性を検証した。最後に、1週間ごとに複数回評価可能であった75名を対象として、反応性 (standardized response mean ; SRM) を評価した。</p> <p>その結果、第1段階で抽出した41項目をもとに、第2段階では、患者の負担や安全性に問題がみられた項目、評価実施達成率100%未満の項目、反応性が低かった項目を除外し、24項目からなるcFASを作成した。計量心理学的特性の検証では、cFASは既存スケールと有意な相関を認め、Cronbachの<math>\alpha</math>係数は0.92、各評価項目の重み付け<math>\kappa</math>係数は0.74から1.00、総スコアのICCは0.97といずれも良好であった。また、2施設における併存的妥当性および内的整合性の評価結果は同等であった。加えて、cFASの反応性は、原病に対する治療内容に関わらず、既存スケールと比較して良好であった。</p> <p>以上から、cFASは、1) 評価基準が明確で簡便であり、評価に特別な道具を必要とせず、身体機能を詳細に評価可能である、2) 高い信頼性 (内的整合性、検者間信頼性)、妥当性 (併存的妥当性, 交差妥当性)、反応性を有する、という特徴を持ち、日常診療や臨床研究に有用な、がんリハビリテーションの発展に寄与できるスケールであると考えられる。</p>			